

財団法人セコム科学技術振興財団助成研究
(平成23年度～平成26年度)

医療の質改善を目的とした次世代診療支援システムの開発と活用

2016年1月5日

研究代表者

京都大学大学院 医学研究科 社会健康医学系専攻 医療疫学分野
教授 福原 俊一

全 体 要 旨

【背景】日本の医療は国民皆保険制度の下、全国民に対してあまねく基本的な医療を提供するというコンセプトで成功をおさめてきた。しかしながら、地域医療を担う医療者は不足している現状があり、結果として医療の質の担保や改善の取り組みについて不十分であると言わざるを得ない。

【目的】医療者自身による、継続的な医療の質改善を容易にする支援システムの構築を行う。また同時に、医療の質改善に必要な臨床研究を実施するためのデータベースを整備する。

【方法】研究者らは、患者自らの健康上の問題や悩みを評価する電子診療システム（pL；p-Listeners）を開発済みであり、当該システムを用いて患者由来情報として QOL などの PRO と呼ばれるアウトカム情報も測定可能である。本研究では、この pL に関して電子カルテと連動させ、既存の診療情報や pL で収集整理した患者由来情報等を含むデータベースを構築した。さらに、プライマリ・ケア医を対象としたコンテンツを整備した上で、このデータベースを用いて実際に診療支援に活用できるかを検討した。

【結果】プライマリ・ケア医師の扱う症候は多岐にわたるが、今回およそ 4 分の 3 のプライマリ・ケア医診療所受診患者を網羅できる 42 の症状を中心にコンテンツを作成した。さらには、電子カルテと連携させることで、医療の質測定のための大規模データベースの構築に成功した。また実際に、モデル症状（過活動膀胱）に対して診療支援が可能かについてプライマリ・ケア診療所にて実証実験を行ったところ、多数の未治療患者が存在することが明らかとなった。

【結論】本研究により、電子診療システムを中心に構築された大規模データベースを用いた、診察前の診療支援の可能性が示唆された。今後本システムを活用することにより、医療の質の改善に寄与することが期待できる。